

キュウリ黄化えそ病の弱毒ウイルス の実用化に向けて



写真1 弱毒ウイルス感染株(赤枠)と黄化えそ病の罹病株(白枠)

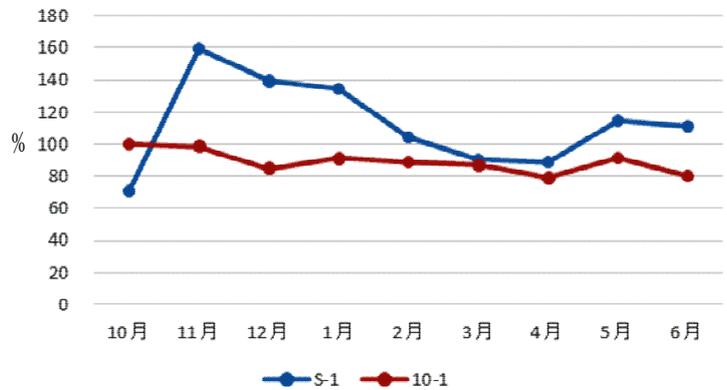


図1 弱毒ウイルス感染株と無接種株の収量
無接種を100としたときの割合、S-1、10-1は弱毒ウイルス株名



写真2 弱毒ウイルス感染株の葉
無病徴の葉(左)と弱いモザイク症状が発生している葉(右)

県内のキュウリ産地では以前からミナミキイロアザミウマによってウイルス媒介される黄化えそ病が問題となっています。本病は、ほ場にミナミキイロアザミウマがほとんど発生していなくても多発する事例も認められており、防除が非常に困難な病害です。

当センターでは2008年に黄化えそ病の弱毒ウイルスを開発し、当該ウイルスを感染させたキュウリでは、野生型のウイルスに強くなる(激しいモザイク症状が出にくくなる)ことを、現地試験などを通じて明らかにしました(写真1)。しかし、弱毒ウイルスのキュウリ苗への感染率が安定せず、実用化への障害となっていました。

そこで、2020年から民間企業、種苗会

社、国の研究所などと連携して、弱毒ウイルスの実用化に向け共同研究に取り組み、安定的な感染株の作出を目指しています。その中で、当センターでは、弱毒ウイルスの感染がキュウリの収量に与える影響などを調査しています。感染株は軽微なモザイク症状を呈しますが、無接種株とほぼ同等の収量であることを確認しています(図1)。しかし、樹勢などの影響により症状が強くなる場合があるため、同様の試験を継続して行っています。また、現地ほ場でも試験的に栽培し、弱毒ウイルスの感染株の症状の程度を調査しています(写真2)。

本研究は地域復興実用化開発等促進事業により実施されています。

(病理担当 岡田知之 088-863-4915)